

会 員 の 声

今こそ、代替エネルギー資源の開発を

富 岡 徹*

或る新聞紙上に、「原価値下げ浸透、外需支柱に生産増」として、やっと、上向きかけたエネルギー需要を解析していた。長く低迷が続けている石油需要も軽油ナフサを中心にして立直りつつあり、外需をバックに生産増を反映したものと見られている。資源エネルギー庁は、「今春は、OPECの原油値下げにより、石油化学など基礎素材産業が一息ついているし、輸出が活発になってきている」と解している。落ち込みが毎月回復してきている点には希望はもてるが、エネルギーの80%弱を石油に依存している我国は、今こそ、“治に居て乱を忘れず”の姿勢が欲しい。石炭、原子力、太陽、地熱、水力などのエネルギー資源をもう一度観るべきだろう。現状を十二分に把握した上で判断したいものだ。エネルギー資源の利用は自給自足型として中規模に進めてみるのもどうか。低成長時代は「middle is beautiful」である。中級エネルギー技術の活性化を行う面で、個性的な地域社会が、イニシャチブをとり、従来の大規模利用から脱却して、多様な効果エネルギー資源利用を地域社会の構成住民や企業や行政が一体となって進め、生活環境の質を高めていきたい。この体勢が確立されて、エネルギーの効果的活用がさらに高くなり、そのクリーンエネルギー資源開発が、ライフサイエンスやソフトサイエンスと共に、三本の柱になる。エネルギー資源の開発には、時間と資金と時期をタイムリーに合致させ“ムダ、ムラ、ムリはないか”を考え、“本当に実現するのか”“もっと易しい方法はないのか”“それがないとだめなのか”“やたらにかかる金と時間をどうにか出来ないのか”と自問自答して進んでいくべきである。54年秋のオイルパニッ

クを忘れかけている昨今、将来起る第3次、第4次の恐怖からは逃避出来ない警句を今こそ深く認識し、対処しておきたい。円滑な開発目標の効果は、すぐに得られないかも知れない。しかし、出来るところから始めれば、ある期間内には、少しでも成果は生れる。まず、身近なところから走り出さなければならない。走り出せば、ある時、必ず加速度がつき円滑な効果が生れるようになる。じっくりと落ちついて考えたい。技術開発の立遅れと政策の手遅れとが90年代前半の社会構造をゆがめてしまうかも知れない。タテマエに立たず、ホンネに立った絶えざる自己啓発を核にした代替エネルギー資源の開発こそは誠に大きな意義をもつものである。

完



* 東急建設(株)

〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14(渋谷地下鉄ビル)